

榛名聖公会

月報

2019年

7月号



はんの木

〒370-3347
高崎市中室田町 5989
榛名聖公会
027-374-1697

「お導き」 パウロ 伊藤光宣

主の御名によって アーメン

1987年3月、大学卒業とともに私は新生会に就職しました。

生まれは東京世田谷、大学生の頃の住まいは神奈川相模原。両親を残して当時の榛名町民となり、既に30年以上が経っています。

10月に生まれ、その年のクリスマスに洗礼を受けました。名前の「光宣」は、生まれた日の聖書日課「この国民と異邦人に、光を宣べ伝える」(使徒行伝26:23)からとったもので、洗礼名もパウロです。

高校時代に堅信を受けました。当時同じ教会内で一緒に堅信を受けた同い年の仲間もいます。

高校までの生活は、毎主日東京にある浅草聖ヨハネ教会まで約2時間かけて通うことが当たり前。日曜学校から始まって、午後の会合(親が出席)が終わるまでの長い一日でした。少年野球や高校の部活などできる雰囲気もなく、教会に行かないのは運動会やテスト前の時ぐらい。日曜学校の皆勤賞は、毎年当たり前のようにもらっていた記憶があります。

さて、お菓子作りや旅行が好きで、高校生の頃はコックか旅行添乗員になるのが将来の夢でした。受験勉強など頭にもなく、面接程度の専門学校に行こうと思っていたのです。

そんな呑気な私に、大きな衝撃と転機が訪れました。

高2から高3になる春休み、東京教区主催のボランティアキャンプが開催されました。行先は…「社会福祉法人新生会」。

私と新生会の繋がり、このキャンプの数日間から始まったのです。

現在のジョージヶ丘3ホームがある場所に、初めてのボランティアワーク先の施設がありました。今私が勤めている榛名春光園がその施設です。そこで一人の女性と出逢いました。職員の声掛けで、居室を訪問しお話をさせていただきました。私の通っていた聖ヨハネ教会だけではなく、祖母の事を知っている方で、初めてお会いしたのにとっても親近感を持つことが出来ました。

ワーク最終日に再度居室へ呼ばれ、棚の上にある物を下ろしてほしいと頼まれました。「こんな簡単な事を、何故わざわざ私に…」と思った時、ふとあ

る聖句を思い出したのです。

『人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない』
(ヨハ 15 : 13)

教会に通い聖書を学んでいながら、それまで出来事を通して聖句が浮かぶ経験などありませんでした。今考えれば、「すごい解釈をしたもんだ」と思いますが…。

高3の授業が始まり、担任の先生にいきなりこう問いました。

「大学に行って、福祉の勉強をしたい。受験のために今からどんな勉強をしたら良いか？」

それまでの私は、受験に向けた準備など一切していなかったもので、担任も苦笑いしていた事を、今でも覚えています。

何校か受験しましたが、唯一受かったルーテル神学大学に進学。ピアノを習っていた私は、男性では珍しくパイプオルガンの授業も履修しました。

大学生活4年間の春・夏・冬休みには、ボランティアとして毎回榛名の地を訪れました。当時は就職など頭にも

なく、榛名に来ることによって得られる経験と自分が福祉を目指すきっかけをくれた場所、そして何よりその時の思いを持ち続けるために来続けていました。

就職場所については、様々な自分なりの条件を持っていましたが、その条件全てを叶えることが出来たのが新生会でした。

就職して30年以上が経ちましたが、今でも仕事に向き合う姿勢の中に当時の思いが生きています。

新生会では多くのボランティアを迎え入れる夏のこの時期を、初心に戻る機会とし、続けてボランティアとかかわりたいと思います。

また、幼い頃から遊び場所の一つとして施設に顔を出してきた高3になる息子も、福祉の道を目指すこととなりそうです。

人生の半分以上を、新生会とともに歩んできました。未だに命を捨てることはありませんが、「その友のために」自分ができることを全力でやり続けていきたいと思っています